

[幼児教育]

保育の可視化が保育者へ与える影響について

— ドキュメンテーションの活用を通して —

藤崎 直子*

1 問題の所在

令和2年5月の文部科学省「幼児教育の質の向上について」中間報告では、「諸外国においても、質の高い幼児教育を提供することで、忍耐力や自己制御、自尊心といった社会情動的スキルやいわゆる非認知的能力を育み、将来の生活に大きな差を生じさせる効果があるとの研究成果をはじめ、幼児教育への重要性についての認識が高まっている。」と報告している。日本のみならず諸外国においても幼児教育が生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な役割を担っており、その後の人生に大きな影響を与えるということを示唆している。

幼児教育については、イギリスの教育社会学者バーンステインが「見えない教育法」と特徴付けている⁸⁾。その理由として、保育者は、生活と遊びの中で一人一人の子どもの興味関心や実態に応じて、暗示的に対応する。そして、保育者は子どもの活動する場を構成するが、そこでどのように活動するかは子ども自身が決めている。そのため、幼児教育は、目的や過程、評価が保育者以外には可視化されにくい特徴をもつ⁴⁾と言われている。幼児教育の重要性の認識は高まっているが、教育方法が見えにくいために、より多くの人に幼児教育の良さを伝えるには課題がある。

幼児教育の「見えにくい」という課題への有効な手立てとして、イタリアのレッジョ・エミリア市の公立幼児学校で始まった、幼児教育方法「レッジョ・エミリア・アプローチ」のドキュメンテーションが注目されている。このドキュメンテーションは、幼児の協同的な学びを可視化するツール、保育者の省察とカリキュラムの生成を促す情報源、親や地域の教育参加を促すことに機能し、質の高い保育を支える強力な道具として位置付けられている⁹⁾。ドキュメンテーションとは、子どもたちの会話や行動をデジタルカメラやビデオカメラを用いて記録し、その中から保育者が焦点化して作成したものである。

玉川大学では、ドキュメンテーション日誌を推奨しており、実習を受け入れている多くの園で実施している。ドキュメンテーション日誌の有効性は、写真が加わることで情報量が多くなり、視覚的に訴えかけてくるために、記録は誰のどの場面のエピソードであるか一目瞭然と理解できる。しかも、保育者が見えていない場面をとらえていることもあり、そこから実習生と実習園の保育者との会話が弾み両者の学びが豊かになっていると報告されている³⁾。

したがってドキュメンテーションは、子どもの活動の変化、思いの過程など学びを生成するプロセスを明示し、幼児教育の「見えにくい」という課題への手立ての1つになる。また、ドキュメンテーションを作成する作業は、保育を可視化し、それによって自己の保育の省察を促す。そして、ドキュメンテーションが同僚との対話のツールとなり、子どもの理解を深め、明日への保育を生み出し、保育の質の向上にもつながる。

当園の課題は、互いの保育を参観し合ったり、全職員で保育を検討したりする時間を捻出することであった。そこで、視聴覚機器を用いて保育を記録し、ドキュメンテーションを取り入れ保育を可視化することは、限られた時間の中で、全職員で保育を検討するには有効な手段であると考えた。しかし、園内でドキュメンテーションのもたらす効果を知っていても、経験している保育者はいなかった。本研究では、ドキュメンテーションを導入する過程において、保育者がどのように手法を取り入れ、保育にどのように影響を与えるかを検証する。

2 研究の目的

日々の保育の振り返りにおいて、視覚的な資料を活用するドキュメンテーションの手法を用いることによって、保育者自身に与える影響について検証する。

*新潟市立大淵小学校

3 研究の方法

(1) 実施期間：令和元年4月から令和2年3月

(2) 対象者：市立幼稚園の年少担任（経験年数9年）、年中担任（経験年数3年）、年長担任（経験年数10年）

(3) 研究の内容

担任は、長期指導計画案、短期指導計画案を作成し、日々の保育案を考え保育を実施している。その際に、定期的に各クラスの短期指導計画案の検討、保育の振り返りを全職員で行い、幼児一人一人の保育を支え、方向性を見出すことができるようにしている。そこで、ドキュメンテーションの手法を導入し、研修計画の中に位置付け取組を検証する。

① ドキュメンテーションの作成の仕方

ドキュメンテーションには決まった形式がなく、「何を目的にするか」「誰と共有するか」を考えて、園の運用に合わせたドキュメンテーションの形式を作っていくと良い⁴⁾とされている。そこで、「一人一人がやりやすい方法で」「写真を撮るところから」「まずはやってみよう」と、新たな取組への抵抗を減らし、以下の流れで進めた。

- ・写真は、研修テーマである「子どもが夢中になって遊ぶ姿」や「気になっている子」など担任の視点から撮る。
- ・作成は、担任が振り返りタイムで検討したい点からとする。
- ・写真から、子どもの思い、会話、教師の援助（声掛け、一緒にやってみる）などを書き込む。
- ・子どもの姿の読み取りに違いはないか、教師の援助や環境構成の改善点を付け加えながら、自分の保育を振り返る。

② 1週間ごとに振り返りタイムを実施

担任自身が作成したドキュメンテーションをもとに保育の説明をする。そこから、子どもの思い、教師の援助、環境設定を検討する。また、検討するときには、幼稚園教育において育みたい資質・能力として「知識及び技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱から子どもの姿をとらえ直し、保育の課題点や改善策などを検討する。

③ 保育実践の具体的な話し合いの場の設定

定期的に日々の保育を15分程度、担任同士が参観し合う。その際には、交代で写真や動画で記録する。検討では、写真と動画の視覚的資料をもとに行う。

④ 視覚的な資料をもとにした研修についての評価

各学期にドキュメンテーションの手法を取り入れた研修の評価を行い、成果と課題、改善点を明らかにし、園独自のやり方を追求する。

4 実践の概要

(1) 視聴覚機器の整備

保育の現場では、保育をしながら記録に労力をかける時間は少ない。そのような中、新たなドキュメンテーションの手法を取り入れるためには、担任が日々の保育をすぐに記録できるようにする必要がある。そこで、一人一台のデジタルカメラを整備した。それにより、保育室はもとより園庭で遊ぶとき、園外に散歩に行くときなど常にデジタルカメラを持ち歩き、写真を集積するようになった。撮影の視点は、子どもの学びの記録として残したいもの、研修のテーマから、気になる幼児の姿、保育環境など保育者自身によって様々であった。

写真を担任が撮るようになったことで、学級のお便りにも変化があった。一人一人の子どもの姿、その時の子どもの思い、活動の経緯を示した内容になり、お便りがまさにドキュメンテーションであった。保護者からは、園での子どもたちの様子がよく分かるようになったという声が聞かれるようになった。保護者からの声は、担任の取組の後押しとなった。

また、保育参観の時には、写真だけでなく動画の撮影もできるように整えた。検討するときには、大勢で画面を見ながら子どもの姿を話やすいように、大型テレビへの接続も可能にした。日常的に視聴覚機器を全職員がスムーズに活用できるように、操作の活用を確認したり、使う場面を意図的に設定したりした。1学期末には、以下のような担任からの評価があった。

【学期末評価の意見交換での担任の声】

- ・自分が記録に収めたいときにすぐに写真に撮ることができるようになった。今までだと、職員室までデジタルカメラを取りに行っていたので、タイミングを逃してしまうことが多かった。
- ・今までは写真を撮るといことは、子どもたちの活動の様子を撮るよりも記念撮影の役割になっていたように思う。1人1台のデジタルカメラとなったことで、子どもが夢中になっている姿を記録に残すことができた。
- ・写真や動画撮影した視覚的な資料を撮りためたことで、子どもの姿から自分の保育を振り返りきっかけになった。

(2) ドキュメンテーションの作成方法の共通理解

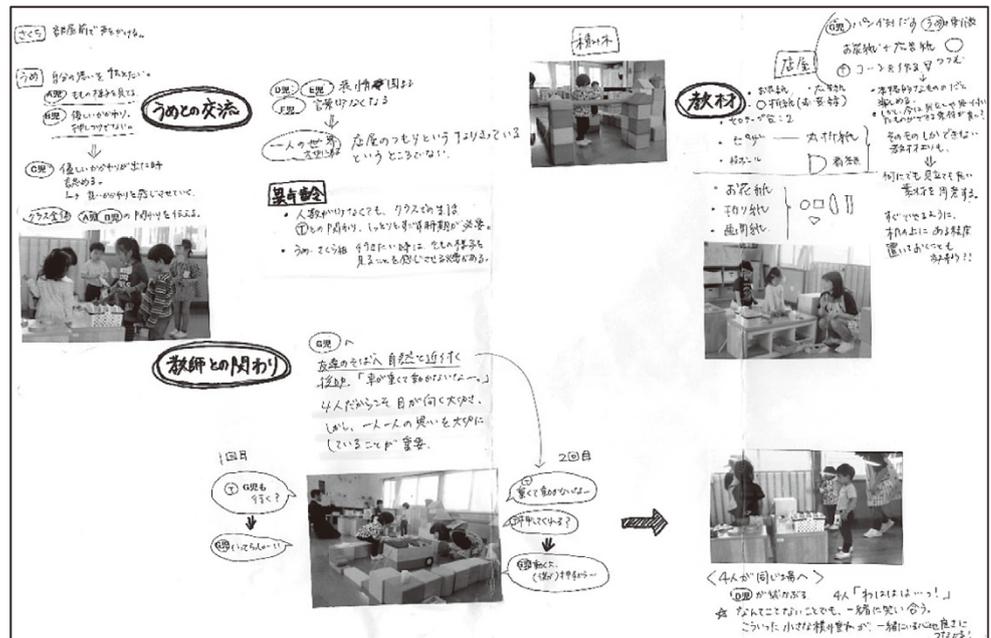
ドキュメンテーション作成への抵抗や不安を解消するために、全員で一緒にドキュメンテーションを作成する機会を設定した。保育参観をした年少組の写真をもとに、以下のように図1のドキュメンテーションの作成を進めた。

はじめに、担任が、子どもたちの活動場面から交流、援助、教材の3つの写真を選んだ。

次に、その写真に、子どもの様子（誰が、何をしているか、話した言葉）、教師の援助（掛けた言葉）、環境（教具、教材、道具など）の事実を書き加えた。

最後に、担任3人で、3つの場面へ意見を出し合い記述した。交流では、「年少組の様子を見て感じさせることが必要」と異年齢交流で気付かせる点を書き込んだ。援助では、「一人一人の思いを大切にすることが重要」と保育で大切にすることを確認している。

教材では、「見立てやすい教材を用意する。机の上に置いておく」と素材や置く場所について書き込んでいる。全員でドキュメンテーションを作成したことにより、1つ1つの作業が保育者の振り返りの視点になっていくことに気づき、作成への抵抗感が軽減された。同僚との対話によって作成されたことも子どもへの理解を深め、教師の援助の価値付けがされ、担任自身の保育への自信と改善に影響を与えた。



【図1】協同で作成したドキュメンテーション

(3) ドキュメンテーションを取り入れた振り返りタイム

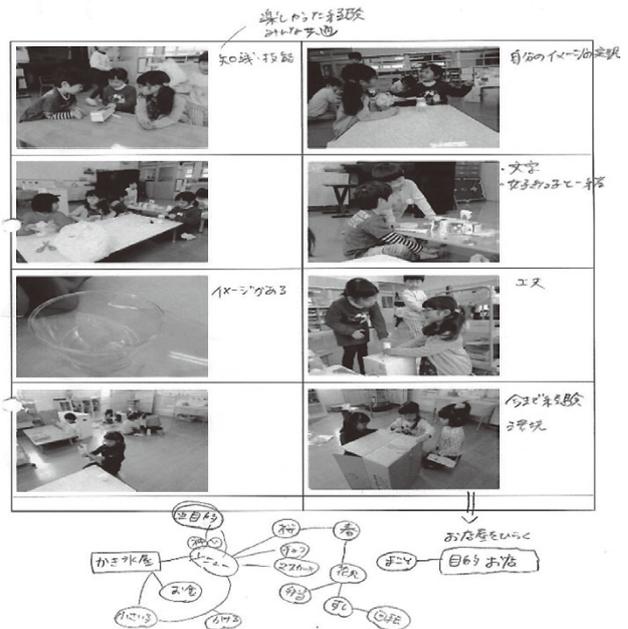
保育を振り返り、子どもの見取りと具体的な援助ができるようにするために、1週間ごとに全担任で振り返りタイムを実施した。これまでの振り返りタイムは、口頭で行っていた。その振り返りタイムにドキュメンテーションを作成し、それを基に保育を説明することとした。初めてのドキュメンテーション作成には、負担感が予想される。そこで、まずは、保育の可視化がもたらす良さを実感できるように、撮りためた写真から検討したい場面の写真を選んで、振り返りタイムを実施した。

写真だけで始まった振り返りタイムではあったが、写真が同僚との対話のツールとなり、子どもの思いを写真に書き込んだり、教師の援助や環境構成を助言し合ったりした。

振り返りタイムを実施し始めた時のドキュメンテーションは、A4に写真を時系列に張り作成したものであった。図2の「風と遊ぶ子どものドキュメンテーション」では、子どもの思いを汲み取った言葉と担任が子どもがなぜその行為をしたのかを書き込んでいる。その結果、子どものやってみようことや行為を関連付け、動機を探ることにつながって



【図2】 風と遊ぶ子どものドキュメンテーション



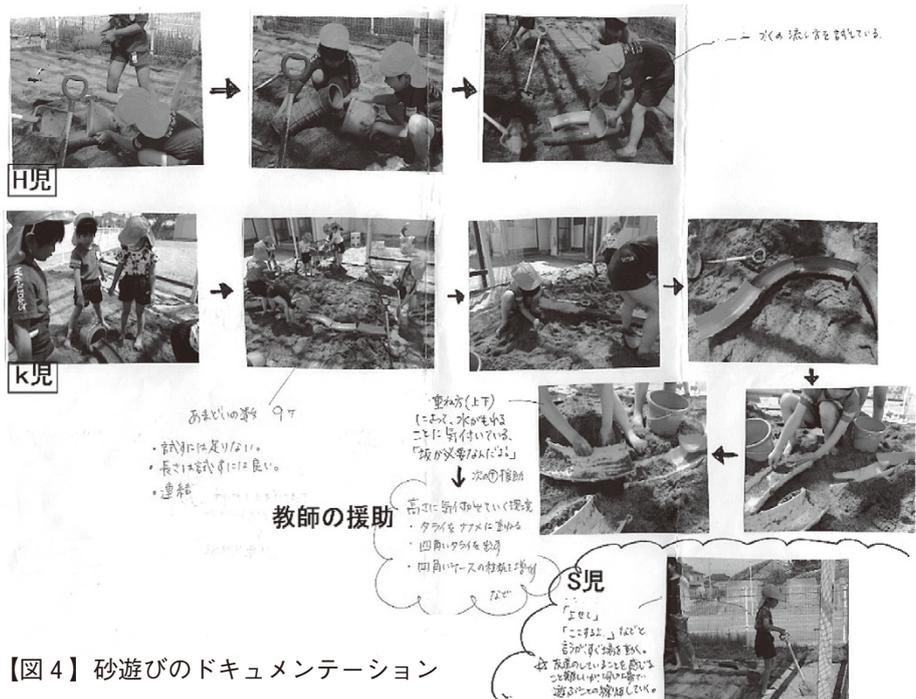
【図3】 写真と保育ウェブでのドキュメンテーション

いる。

図3のドキュメンテーションには、「子どもたちの楽しかった共通の体験」、「今までの経験を生かしている」と書き込まれている。そこから、保育ウェブでかき氷屋がスタートとなり、メニューから桜、チョコ、マスカットとその後の遊びの広がりを書き込み、遊びの目的をお店と記述している。担任自身、今までの活動を確認することができ、確かな学びを実感している。保育ウェブで表現したことで、子どもたちの遊びの広がりや目的を確認している。

この図2と図3の2つのドキュメンテーションから、子どもの思いや遊びの変化、その背景を振り返っている。この時期は、子どもの思いを大事にすることに重きが置かれていることが分かる。繰り返し実施することで、写真での振り返りの良さを実感し、試行錯誤しながらドキュメンテーションをもとに、振り返りタイムが実施されるようになった。

図4の砂遊びでのドキュメンテーションでは、3人の子どもの遊びの変容と教師の援助として、高さに気付けていく環境、タライを斜めに重ねる、四角いタライを出す、四角いケースの種類を増やすなどと記述している。ドキュメンテーションを通して、担任が保育活動を振り返り、活動の進み具合、教師の援助や環境構成の不備な点をしっかり確認ができ、次の活動の改善点に気付くことができた。このことにより、遊びの過程が明確となり、子どもに合わせた保育計画を立てることもつながっていった。図2と図3と図4とを比較すると、1枚にまとめられる量や視点の広がりが出てきた。繰り返しドキュメンテーションを作成していくことで、子ども一人一人の遊びの姿を追うようになり、次の活動展開に向けて、教師の援助の視点も加えるようになってきた。つまり、担任の振り返り



【図4】 砂遊びのドキュメンテーション

の変化でもあり、子どもへの理解が一層深まっている。1学期末には、以下のような担任からの評価があった。それにより、ドキュメンテーションを作成するに当たり、子どもの姿、教師の援助、環境構成から担任からの視点の記入が大事であることを確認することになった。写真をもとに担任自身が保育を振り返るプロセスに意識が向き始め、同僚との活発な対話が保育の質を高めることを実感していった。

【学期末評価の意見交換での担任の声】

- ・1週間ごとの振り返り時に、視覚資料をもとに行ったことや幼稚園教育において育みたい資質・能力の3本の柱で検討したことで、課題となっている部分を明らかにし教師の援助に生かすことができた。
- ・写真をもとに振り返る時に、まず担任なりの考察や子どもの読み取りがあると、より協議する時に意図が伝わりやすいと感じた。

(4) 保育実践の具体的な話し合いの場の設定

定期的な日々の保育を15分程度、担任同士が参観し合う場を設定した。その際には、交代で写真や動画の撮影を行った。検討は、写真と動画の視覚的資料をもとに実施した。検討で取り上げた場面は、担任が、Y君に声を掛けほかの子どもがいる場に誘っているところであった。Y君は人見知りもあり、3人にかかわっていきこうとする場面が少ないことを担任は気にしていた。

『動画で取り上げた、担任がY君を誘う会話の場面』

教師1：「Y君、行く？」 <1回目>

Y君1：「行ってらっしゃい。」(積み木の家の中で遊ぶ)
—しばらくして—

教師2：「重くて動かないなあー。」<2回目>
「押してくれる。」

Y君2：「動くよ。(僕が) 押すから。」

(3人が遊んでいるお店屋さんに教師の車を押しながら行く。)

そこで、担任は、3人がお店を作り、ピザなどの食べ物を作っているところにY君がかかわり、友達と一緒にいる心地良さを感じられるように、1人で積み木の家の中にいるY君に「Y君、行く。」と声を掛け誘った。1回目は、Y君に「行ってらっしゃい。」と返され、うまくいかなかった。2回目の声掛けでは、担任と一緒に友達

のお店に行った。同僚から「直接的な言葉掛けでなく、Y君の協力が必要と感じさせる言葉かけが良かった。」と保育の承認の言葉があった。しかし、担任は、自分の願いから声を掛けY君が自分の遊びを中断させたのではないかという心の内を話した。動画で前後の様子を確認しながら、Y君の行為から思いを探った。教師の2回目の声掛けの前に、Y君が時折友達の様子を見ている姿があった。そのことから、3人の遊びの様子が気になっていたのではないかと読み取った。その点から、教師の声掛けの是非について1つの根拠が見出すことができた。また、担任は、他の子どもたちとかわかっていてその姿に気付いていなかったために、保育を動画で確認することで、可視化することの良さを感じることもつながった。今回のように他者から写真や動画の撮影をしてもらった場合は、撮った人の見方となることから、撮る視点をどうするかということも課題として挙げられ、園内で決めた視点や担任の要望を聞き撮影することを確認した。

【学期末評価の意見交換での担任の声】

- ・写真の他にも動画で記録したことで、子どもの姿や教師の援助を再度確認し、また全員で同じ場面を共有しながら振り返ることができ検討しやすかった。
- ・短時間だが保育参観をすることで、その場で援助の仕方などの助言を受けることができた。動画も活用することで、見逃していた場面や子どもの声を確認することができ、今後の指導や反省に生かすことができた。

5 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究から得られた成果

写真を用いたドキュメンテーションを作成することは、保育を可視化し、保育を振り返ることにつながった。学期末には、ドキュメンテーションの研修の成果と改善点を確認し、取組を更新し続けた。その結果、以下のように保育者自身そして、保育者間の関係性へ、更には、園の保育の質を高める取組へと影響していった。

①保育の可視化によって、保育者自身へ与えた影響

- ・多面的な視点で子どもの思いや行為を見取ることができた。
- ・子どもに対する新たな発見があった。

- ・日々の保育を振り返る時間となり、自己を見つめることになった。
- ・自分の見逃していた場面を知り、教師の援助の視点を広げた。
- ・写真がもたらす効果を実感し、子どもたちの遊びの広がりやきっかけづくりに生かすことができた。
- ・援助の価値付けがされ、担任自身保育への自信を得た。
- ・砂遊びの活動では、遊んだ砂場を残しておくことが難しいという特性から、前日までの活動を写真に残し、子どもたちと活動を構想するという発想が生まれた。(写真1)。



【写真1】子どもたちの遊びの広がりに活用

- ・保護者に子どもたちの様子を知らせ、理解・協力を得たいという思いの実現のためには、写真を活用することがより良い方法であると気づき、保護者会、個別懇談会で視覚的資料を活用した。(写真2)

②可視化された保育によって保育者間に与えた影響

- ・写真や動画によって、同僚と同じ場面を共有しやすかった。
- ・検討場面が焦点化し、子どもの思いから教師の援助を明らかにできた。
- ・協同的な学びの場となり、保育者間の協力関係の風土づくりにより影響を与えた。



【写真2】保護者との対話ツールとして活用

③ドキュメンテーションの活用の広がりが園の保育の質を高める取組へ影響

- ・次年度の研修の中心として、ドキュメンテーションを位置づけた。ドキュメンテーションの方法は、自園独自の作成の仕方と視点を明確にすることができた。

(2) 今後の課題

子ども理解、教師の援助につなげ、保育の質を高めるためには、ドキュメンテーションを活用した保育の可視化は効果がある。しかし、ドキュメンテーションは、作成手順はシンプルではあるが、決まった形式があるわけではない。それがゆえに、保育者に迷いが生じる。ドキュメンテーションを進める上では、何をよりどころにするのか明確にし、取組を保育者間で合意形成を図りながら進める必要がある。また、園でドキュメンテーションの作成手順、活用場面、時間を確保し、日々の保育の中で継続して取組める体制を整えることも必要不可欠である。そして、作成に時間をかけないためにもICT端末を活用できるような整備も必要である。なにより、保育者同士が気軽に保育についてコミュニケーションを取れるような関係性、園の雰囲気づくりは重要である。その上でドキュメンテーションを活用することは、「見える幼児教育」を創り出し、園全体で子どもの学びや育ちを共に喜び、豊かな学びを創り出す要因の1つになり得るのではないだろうか。

【引用・参考文献】

- 1 秋田喜代美 松本理寿輝 『保育の質を高めるドキュメンテーション 園の物語りの探究』中央法規出版、2021年
- 2 大豆生田啓友 「ドキュメンテーション(写真記録)とは何か」、『幼児教育じほう』全国国公立幼稚園・こども園長会、第49巻、第4号、2021年、36～37 pp
- 3 大豆生田啓友 「なぜ、写真が保育の質向上のツールとなるのか?」、『幼児教育じほう』全国国公立幼稚園・こども園長会、第49巻第5号、2021年、36～37 pp
- 4 樋口健介 村岡美沙 元木麻水 大西美里 庄司恵「ドキュメンテーションの導入方法の検討」『羽陽学園短期大学紀要』第10巻第4号、2018年、485～499 pp
- 5 文部科学省 『幼児教育の質の向上について(中間報告)』令和2年5月26日
- 6 文部科学省 『幼児理解に基づいた評価』チャイルド本社、平成31年3月
- 7 文部科学省 『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、平成30年3月
- 8 『幼児学用語集』北大路書房、110 p
- 9 『幼児学用語集』北大路書房、114 p